Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2016」

# 入 賞 作 品

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

# 目 次

## ★「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2016」入賞作品


熊本大学　文学部文学科 2 年　後藤翔 ........ 2
一橋大学大学院　社会学研究科地球社会研究専攻　1 年　山本綾子 ........ 3
株式会社ユーグレナ　管理部総務人事課　山口真弓 ........ 4
安田女子大学　文学部書道学科　2 年　井ノ下千夏 ........ 5
筑波大学附属高校　1 年　角南沙己 ........ 6
東京学芸大学　教育学部 2 年　佐野桃子 ........ 7
宮崎公立大学　人文学部国際文化学科　4 年　大久保弘樹 ........ 8
私立仙台育英学園高等学校　2 年　門馬涼 ........ 9
創価高等学校　3 年　北條久美 ........ 11
大妻女子大学　人間関係学部　濵田麻衣 ........ 12
創価大学　通信教育学部　教育学部　村上恵理 ........ 13
熊本大学　文学部　コミュニケーション情報学科　2 年　岩野美咲 ........ 14
法政大学 国際文化学部 3 年　長橋侑生 ........ 15
県立広島大学　経営情報学部　経営学科　3 年　流森健吉 ........ 16
聖心女子大学　1 年　和田栞奈 ........ 17

**★優秀賞**

**ティーシャツと短パンの勇者**

**熊本大学 文学部 2年 後藤 翔**

ティーシャツと短パン。それが私の小学生の頃の格好だった。私は、あの頃の私から学ばなければならない。

私たちに余計な言葉は必要なかった。彼がつまらなさそうに校舎の壁にもたれかかって、私たちの方を少しだけ羨ましそうに見ていた、それだけだった。それだけで私たちは一緒に校庭を駆け回り、友達になった。

小学校三年生の一学期に転校してきた彼は中国人だった。小学生にとって外国からの転校生というのは新鮮なもので、クラスの話題がまだ見ぬ彼一色に染まるのに時間はかからなかった。「チュウゴクからだって！」「すげー」と私のクラスは沸きに沸いた。かくいう私も例外ではなく、よく知りもしないチュウゴクからの転校生に期待を抱いていた。朝礼の時間になると、担任の先生と一緒に彼が入ってきた。期待と興味の入り混じった視線が飛び交う教室。しかし彼が教室に入ってきたとき、だれもがこう思っていたことだろう。「チュウゴク人ぽくない」と。それもそのはずである。まだ体も十分に発達していない九才の彼は日本人の私たちと目立った身体的差異はなかったのである。さらには同じアジア圏出身であり、肌の色や瞳の色、髪の色などは私たちと大差はなく、見た目の特徴の差など微々たるものであったため、小学生の私たちにわかるはずもなかったのである。私たちとどこも変わらないチュウゴク人の彼の登場により、熱を帯びていたクラスの空気も少しずつ落ち着いていった。そんな空気をよそに担任は彼の紹介をした。そして最後に彼は精いっぱいの身振り手振りで「これからよろしくお願いします」と言った。中国語で話されたその言葉を私たちが聞き取れるはずもなく、異国から来た精いっぱいの彼のあいさつを私たちは「変な言葉だ」と言って笑いの渦の中にかき消したことを覚えている。私たちと彼との違いは一つ、日本語が話せないことだけだった。

小学生とは不思議なほどに適応力があり、異国から来た彼と打ち解けるまでそう時間はかからなかった。分かり合うための御託は必要なかった。彼と目が合って、「こっちへおいで」とうなずいて手を広げるだけでみんなで仲良くサッカーや野球ができた。そこにチュウゴク人の彼はいなかった。いるのは楽しそうに校庭を駆け回る私たちの友人としての彼の姿だけだった。私たちは目と目が合って、一緒に遊ぶだけでお互いのことを理解できた。そこには人種も言語も性別も政治的思想も歴史的背景も、何一つ介入しない。そんな重たい鎧を小学生の私たちはまだ装着せずに、短パンとティーシャツだけで彼と真っ向からぶつかり合った。もしかすると、重く硬い防具など着けない方がお互いがお互いを傷つけないことを私たちは理解していたのかもしれない。

いつから日本や中国、世界といった基準で境界線を決めてしまうようなつまらない人間になったのだろうか。小学生の頃の私たちが言語の違いを笑い飛ばしたように、人種の差をボディランゲージで埋めたように、歴史的背景など校庭に必要としなかったように、国家間の隔たりなど気にも止めない時代がわたしたち日本人にもあったのではないか。大人になっていくにつれて、ぴかぴかの制服やしゅっと伸ばされたスーツを身にまとっていくにつれて、私たちは「日本」という重たい鎧を身に纏って世界を見渡すようになる。裾の汚れた短パンとよれよれのティーシャツだけでいた

方が簡単に世界と向き合えたのではないだろうか。
そうして私はまた彼のことを思い出す。
「みんなありがとう。またね」
そういって彼は小学五年生の夏に関東の方へ引っ越していった。転校すると言った時の彼の顔は少しだけ歪んでいて、涙で瞳もうるんでいて不格好だったが、確かに彼は笑っていた。「分かり合えてよかった」と彼が言っているようでもあった。
私は、あの頃のティーシャツ短パンの勇者を誇りに思う。

## 中華帽子から始まった 4 歳児の夢

**一橋大学大学院　社会学研究科地球社会研究専攻 1 年　山本　綾子**

4 歳の頃、父から中華帽子をもらったことが、私と中国との出会いでした。中国へ行った父がお土産として買ってきてくれた帽子でした。これは、私にとって中国のみならず海外を初めて知った瞬間でした。その帽子の丸い形、デザイン、生地が珍しく、毎日喜んでかぶって遊んでいました。幼少の子どもながら、中国の文化にとても魅了されました。その後も、中国の女の子が中国の人形をもっているアニメをテレビで見て、「いつかあの人形をもっているような中国人の女の子に会ってみたいな。一緒に遊んでみたいな。」と思っていたことを印象深く覚えています。

中国に興味をもち始めた私のために、両親は私が高校生になるまで中国の芸術団の日本公演に頻繁に連れて行ってくれました。私が住んでいた石川県は、日常的に海外の人を見たり、海外の人と接することがとても稀な地域であったため、私にとって中国の芸術団の公演を見ることは、中国に限らず海外の人と触れ合い、他国の人を理解する貴重な機会でした。中でも、最も思い出深い演目があります。中国の雑技団の公演で、男の子が棒から棒へ空中で移動する演技があり、移動する瞬間「ハッ」という呼吸が聞こえました。その瞬間、同世代の男の子が日本と中国の交流のために日本へ来ていること、棒から落ちたら大怪我をするかもしれないのに命掛けで頑張っている姿に言葉では表せないほど感動をしました。それとともに、将来、私も両国の関係づくりに携わりたいと思い始めるようになりました。

もう一つ、私が両国の関係づくりに貢献したいと思うようになった出来事があります。それは、祖父です。祖父は時々戦争の話をしてくれました。口数の少ない性格であった祖父は、一言二言絞り出すように「戦争で中国へ行った。」と話しをしてくれました。歳をとって痴呆が進んだ祖父は、ある日テレビに映る船を見て、悲しそうに「あの船に乗った。」と一言だけ一粒だけ涙を流して呟きました。それは、当時日本兵が中国へ行く際に乗っていた船のようでした。私は、この時、戦争の恐ろしさを感じました。家族のことも認識できないほど痴呆が進んでいても、戦争の記憶は決して消えない程悲しく、辛いことなのだと知りました。思えば、祖父はずっと中国の人のことを気にかける人生だったと思います。終戦後も祖父の心では戦争が続いており、亡くなった時の心からの穏やかな表情を見て、祖父にとっての戦争がやっと終わったのだと感じました。祖父は終戦と同じような暑い日にたくさんのひまわりに囲まれて生涯を終えました。あのときテレビで見た船が、互いに戦うためではなく、友誼を交わすための船であったら、祖父はどれだけ希望に満ち溢れて中国へ行くことができたか、帰ってくることができたか、その後の人生を過ごすことができたかと思うと、深

く考えさせられます。両国の青年が友誼のために往来する夢を祖父に託されたのだと思っています。

青年交流を始めとする交流事業は、国交正常化後多く実施されています。両国の間には未だ課題はあると思いますが、長い歴史と未来を俯瞰することで関係づくりの途中段階であるという認識をもつことができ、着実に少しずつ友誼の道が拓かれていることに気付けると思います。私は、両国は兄弟だと思っています。兄弟は喧嘩をすることもありますが、必ず仲直りすることができます。兄弟は喧嘩をしても、心の底では互いを思い合っています。その心が日本と中国にはあると思っています。私は、将来、両国を始めとし各国が継続的で安定した国家間関係を構築できるよう貢献したいと思っています。夢は、いつか、昔見た雑技団の男の子にもう一度会い、両国の友誼に励むことを互いに誓い称え合うことです。

## ″圣女″

**株式会社ユーグレナ管理部総務人事課　山口　真弓**

″よく働き、よく食べ、よく笑う″
これが私が彼女に抱いた最初の印象だった。彼女は私が大学の時に知り合った中国人だったが、中国人だということを忘れてしまうくらい日本語が上手で彼女といるととても元気になり、一緒にいて楽しかった。

そんな彼女と久しぶりに連絡をとった時のこと、彼女がふと私に溜息まじりにいった

「我现在已经是剩女了」

私は彼女が″剩女″という言葉を使った時、だいたいの日本語の意味を知っていたので、
すぐに笑いながら「″剩女″だなんて大げさだな、まだ若いし、結婚していなくったって普通でしょ。」といった。実際、彼女は私と 2 歳しか年齢が変わらず、別に結婚に焦るような歳でもないと思ったからである。彼女は「うん、そうだね」といい、そこでその話題は終了したが彼女のそっけない言い方は私の頭の隅に記憶としてぼんやりと残った。それから間もなく彼女はお見合いで恋人を見つけ、交際期間もほとんどないまますぐに結婚をした。

しばらくたったある日、ある記事をみた。それはある日本の化粧品会社の CM が、中国で話題となり 100 万回以上再生されたという記事であった。その CM の内容は中国人の女性達が″剩女″という言葉にプレッシャーを感じ、もがき苦しみながらも自分の生き方に誇りを持ち社会にそして両親に自分という存在、生き方を認めてもらおうとする CM であった。私はこの記事を読み以前彼女と会話した時をうっすらと思い出した。彼女は口には出さなかったものの仕事が楽しいあまりに、早くお嫁にいかないことを親不孝だと悩み苦しんでいたのではないだろうか。そう考えると彼女に対し、彼女の話を笑い飛ばしてしまった自分が恥ずかしくなり、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

その後反省した私は″剩女″という言葉の意味について、中国人が結婚に対してどのような考えを持っているのかインターネットで調べることにした。調べていくうちに日本人と中国人では結婚に関してかなり考え方の差異があることを知った。中国人は家系を非常に重視し、永遠に家系が続

くことを望むために、結婚を大切にし、結婚が一種の親孝行としての位置にあることが分かった。また同じ中国人でも世代間で結婚に対して考え方にかなりの差があり、両親世代は子が結婚しないことに悩み、子は親がお見合いを進めるのに悩むことがあることを知った。今、中国では多くのドラマや映画で″剩女″を題材にしたものが制作されているようである。

私は今回″剩女″という言葉から言葉の意味だけでなく、中国人の結婚に対する考え方や、中国文化を学ぶことができた。そして何よりも嬉しかったのは同じ女性として″剩女″と呼ばれている中国人女性が、苦しみながらも、社会のプレッシャーにも負けず、自分の幸せを自分で築き、人生を楽しんでいるということが分かったということである。

私も″剩女″だ。今は仕事や趣味が忙しく楽しいうえ、恋人を見つける暇がない。もしかすると私も今は何もプレッシャーがなくても、もう少ししたら結婚について悩み苦しむ時がくるかもしれない。でもそんな時こそ、中国人女性の強さを思い出し、結婚しようがしまいが、自分を見失うことなく人生を楽しみたいと思う。

そう、私達は″剩女″ではない、″圣女″なのだ。

## 書で結ぶ日本と中国

**安田女子大学 文学部書道学科 2 年　井ノ下　千夏**

言葉で表現できないとは、まさにこういうことなのだろう。これは、大阪市立美術館で王羲之の蘭亭序を目睹した際の率直な感想である。初めて蘭亭を目にすることができたという感動とともに、その現物が持つオーラに私は圧倒され、強烈に惹きつけられたのである。洗練された線質、絶妙な表現技法が随所に注ぎ込まれており、蘭亭が天下の劇跡とされる理由、また書聖と尊崇された王羲之が空海から後世の私たちまでも魅了してやまない理由がわかったような気がした。

中国には、王羲之をはじめ数多くの名跡が存在する。それは中国にとどまらず国や時代を超え、現在の日本にも絶大な影響を与えていることは言を俟たない。日中の先人たちによって脈々と伝えられた文化の営みがあるからこそ、私が今ここで書を学ぶことができるのだ。書という最高の文化を齎してくれた中国に対して、私は心から感謝している。

私が初めて筆を持ったのは小学校１年生の時である。習字教室に通いはじめ、それが週に一度の大きな楽しみとなった。練習を重ねれば重ねるほど、目に見えて上達していくのがわかり、書の魅力にどんどんと引き込まれていった。高校生になると、書の学びに新たに「臨書」が加えられた。手本を見て書くことには変わりないが、「古典」を手本とするのである。その時真っ先に薦められたのが、王羲之の蘭亭序であった。しかし、当時の私は、「日本には空海や小野道風など優れた書人や書跡があるのに、どうして中国のものを学ばなければならないのだろうか」と不思議に思ったのである。そこで、王羲之や空海について詳しく調べてみたところ、随一の能書家であった空海も、当時の日中の書道文化の中で王羲之の書を深く学んでおり、そのような王書を基礎として自らの書風を築き上げていったことがわかった。このことは私にとって非常に大きな衝撃ではあったが、それと同時に、中国に対する認識が現在とは著しく異なっていることに思い至ったのである。

現在の日本において、「中国」と聞いて私たちは何を想像し、またどのようなイメージを持ってい

るだろうか。新聞やテレビでは、商品の偽造や転売目的の買い占めなど、中国に関する否定的な報道が少なくない。「これだから中国は…」と、あるニュースを見ながら友人が呟いた。彼女に深い意図はなく、無意識に発せられた一言だろう。マスメディアが盛んに報じる事象は、確かに現代中国の「現実」の一部であることは否定できない。しかし、中国が抱えている問題や日中間に存する政治的問題ばかりが取り上げられている気がするのは、私だけであろうか。このような報道で知られる中国は、本当の中国のごく一部を切り取ったに過ぎない。悠久の歴史と豊かな文化を築き上げてきた中国に対して、如上のマスメディアによる情報だけで偏見を持ってしまうことを大いに危惧している。

私は現在、大学で書道学科に所属し、王羲之をはじめとする様々な古典の臨書に励んでいる。その度に、大阪で受けたあの感動をもう一度味わってみたい、また中国について更に造詣を深めていきたいという思いを強くしている。中国の書道文化が日本に伝えられたことによって、日本の書が生成・発展し、ひいては私が今、私自身の書を深め、学び続けることができている。書道文化に携わった人々に対して、率直に「ありがとう」という感謝の意を伝えたい。

日中両国間に横たわる種々の問題は、その解決にはまだまだ時間を要するだろう。それでも私は、中国に対する偏見を少しでも減らしたいと考えている。そのきっかけとして、圧倒的なオーラを放ち、今現在でも人々を魅了してやまない書の名品の存在があろう。幾世代を超え、現代まで受け継がれてきた優品の数々。これらを踏まえ、私は書を通じて中国の魅力を是非とも発信していきたいのである。

## 希望の言葉――「辛苦了」

**筑波大学附属高校 1 年　角南　沙己**

私は「辛苦了」という中国語の言葉がとても好きだ。深い思い入れがある。北京で現地の道場に通っていた時、剣道の稽古後に必ず先生方や仲間達とこの言葉を交わしていた。普段の会話では仕事や作業の後に「お疲れさま」という意味で使うが、私の知る使い方は少し違う。剣道の稽古後に掛け合う場合、稽古をつけてくれた相手に対し感謝し、互いの労をねぎらうという意味を含んでいて、巷で使われる意味とは少し異なるように感じた。中国語が全く話せなかったため、はじめは中国人の剣道仲間たちとコミュニケーションを取れずもどかしかったが、そんなときに教えてもらったこの言葉のおかげでお互いの距離が一気に縮まった。厳しい稽古の後で、流れ出る汗を吹きながら、笑顔でこの言葉を掛け合うと、辛さや疲れも吹き飛んで、お互いとても清々しい気分になるのだ。稽古の際だけでなく、大会など試合後でも対戦相手に対して「辛苦了」と言って相手への尊敬の意を素直に表現することがしばしばあった。こんなことは日本では一度も経験しなかったのでとても驚いた。

去年の 8 月から今年の6月まで約一年間、北京の清華大学附属高校国際部に留学した。剣道をするために北京に来た訳ではなかったが、小学校 4 年生から習っている剣道の稽古を北京でも続けたくて、知り合いの先生に紹介して頂き道場へ通っていた。そこで日本人の先生方から熱心に剣道を学ぶ真剣な中国人達の姿を目の当たりにして、衝撃を受けた。20 代 30 代を中心に男女が毎週 2、3 回道場に通い稽古に精進している。中には夫婦で剣道を始めたのをきっかけに子供

達にも習わせている剣道一家もいた。ある人は日本の剣道をテーマにした漫画の影響で興味を持ち、ある人は自分の日本語教師が剣道をやっていたために習い始めたようだ。きっかけは違えども、剣道家たちはみんな礼を重んじる剣道を愛していることがわかった。現在、中国での剣道人口は約 15,000 人とも言われ、年々増えているそうだ。

なぜ中国人がこれほどこの日本の文化を深く学ぼうとしているのか不思議に思えた。礼を重んじる思想は古代中国で生まれ、その思想は深く中国に根付いていると感じた経験がある。昨年の冬、嵩山にある少林寺を訪れた。早朝から稽古に励む若い修行僧や年配の和尚さんの姿まで多く見かけたが、武術の稽古や演技は礼に始まり礼に終わっていた。ここになにか剣道と深く関わる共通点を感じる。嵩山は山岳信仰の場として北魏の時代から道場や仏教の道場が置かれてきた。人間の存在を上回るなにか大きな力を敬うという思想がある。自分たちよりも大きな力、例えば「自然」や「気」を感じることによってより謙虚になり、相手への敬う気持ちも生まれることから、中国人の剣道家が使う「辛苦了」は普段日常生活で使うものと異なる意味が生まれたのではないかと感じた。

今年 3 月に公表された内閣府の対中感情の世論調査で、日本人の 8 割以上が中国に親しみを感じていないと答えた。この数値は過去最高であり年々上昇しているのが事実だ。理由の一つには、どちらの国の方が発展している、大きいなどの覇権争いになっているからである。しかし私は一年間の滞在で、中国人と日本人が一つの武道を通して繋がることができるということを身にしみて感じた。日中の剣士同士が互いの稽古を通して剣道をより理解したいという共通の思いの中で、国境の壁を超えて繋がることのできる鍵を見つけられると信じている。ここで生まれた「辛苦了」は中国と日本を結びつける新たな信頼関係となるだろう。どちらが強く、どちらが上に立つべきなどと考える先には未来はなく、人間同士の区別のない自然な形がこれから大切になってゆくに違いない。こういう時代だからこそ、日中の間で武道を通した交流の機会をより増やし、武道を一つのきっかけとして人よりも大きな敬うべき力の存在を感じ合うべきだ。

## わたしの「ものさし」で見た中国

**東京学芸大学 教育学部 2 年生 佐野 桃子**

私が中国に初めて訪れたのは昨年の八月である。それ以前は、領土問題や戦後処理問題、そして中国人のマナーの悪さなど、中国に対する印象は悪かった。その反面、そうした悪い印象は日本のメディアからの情報によって作られたものであると悟り、真実を自らの目で確かめたいと思い中国を訪れることにした。その後、北京への短期留学や南京や上海での日中歴史教育交流委員会の活動を通して、中国とは如何なるものかを少々ではあるが、自分の身体で知ることができた。こうした経験を通して、メディアからの情報はあくまでも判断材料であり、物事の真意を見極めるため、中国をさらに知ることで、自らの「ものさし」を持つ必要があると感じた。

私は中国から帰国した後、日本で積極的に中国人と関わる機会を設けることにした。中国人留学生と、日中の政治をテーマに議論をしたり、日本と中国の文化をお互いに紹介し合ったりした。先日、東京学芸大学が主催する国際交流合宿で、富士山の樹海を訪れた際には、中国人留学生 8

人と朋友になった。私は彼らに、「为什么你对日本感兴趣呢？(何故日本に興味を持ったのか)」と

尋ねると、彼らは決まって「因为我喜欢日本的动漫和漫画(日本の漫画やアニメが好きだから)」と

回答した。「哆啦Ａ梦(ドラえもん)」や「海贼王(ワンピース)」など、中国では日本でも広く認知されて

いる漫画やアニメが人気であるようだ。私も日本の漫画やアニメは好きであるため、それらの話題で彼らと盛り上がった。思い返すと、昨年 12 月に上海市金陵中学校を訪れた際にも、現地の学生が我々日本人に発した質問の多くが、日本の漫画やアニメに関するものであった。南京大虐殺などの日中歴史教育問題を議論するために訪れていた私は、開いた口が塞がらなかったが、日本の漫画やアニメが中国で受け入れられてることを強く感じた。

上記のことは中国にだけ当てはまるのではなく日本にも当てはまると私は思う。「福建省推奨」と、ラベルに表記されたサントリーの「烏龍茶」は日本で広く知れ渡っており、コンビニや自動販売機など至る所で見ることができる。また、東京国立博物館で開催された特別展「始皇帝と大兵馬俑」を訪れた際には大勢の人が足を運んでいたほか、三国志をモチーフとした漫画「キングダム」が特別展とタイアップするなど、始皇帝や三国志など、中国の歴史が日本で受け入れられていることを実感した。三国志は日本では長年人気を集めており、ゲーム「三國志」はシリーズ 12 が発売されるほどの人気作である。

1890 年代以降、日清戦争（中国では「甲午戦争」という）や第二次世界大戦など、日本と中国は互いに対立し合ってきており、現代も、領土問題や戦後補償問題など、対立は形を変えながら続いている。しかしながら、日本での「中国の歴史や食事」、中国での「日本の漫画やアニメ」などのように、日常生活において、まるで対立し合っていることを忘れたかのように、日本と中国は共存し合っている。対立とは一見無縁そうな、ありふれた日常生活における中国が、我々日本人との間に親しみを生む。逆もまた然りである。だからこそ、私はもっと中国と日本の文化交流をするべきであると思う。そうした文化交流から日本と中国の相互理解、ましてや政治問題に対する互いの視点に立った見方ができるようになると考える。

こうして、日本で多種多様な中国に触れることで、私の中で少しずつ中国に対する印象は良い方向へと変わってきた。現在では、中国人や中国政府に対する理解も深まっている。それは決して表面的な気持ちではない。メディアの情報だけではなく、日本で中国人と交流したり中国の歴史や文化を積極的に学び、自らの五感で中国を感じたことから生じた正直な気持ちである。私は今、自分の「ものさし」を心の中に持ち始めている。

## 人生で初めて出会った中国人

**宮崎公立大学　大久保　弘樹**

　私は、中学生の時に卓球を始めて以来、卓球がずーっと大好きだ。それは、一人の中国人との出会いがきっかけだった。部活動だけでは飽き足らず、私は先輩に誘われて地元の卓球クラブに入ったのだが、そこでコーチをしていたのが中国人の胡さんだった。胡さんは私が人生で初めて

出会った中国人であった。胡さんは卓球のことだけではなく、たまに中国のことや簡単な中国語も教えてくれたのを今でも覚えてる。でも、当時中学１年生の私にとっては、何のことだか分からなくて、日本語を流暢に話す彼女のことを、私は中国人だと意識したことはあまりなかった。私にとっては、いつも笑顔で卓球を教えてくれる、優しいお姉さんだった。そんな彼女が私は大好きだった。

それから高校を卒業して、私は地元を離れて県外の大学に進学した。卓球が大好きな気持ちは変わらなくて、将来は卓球に携わる仕事がしたいと思っていたが、大学で何を学べば良いのかずっと悩んでいた。そんな時に、よくあの頃の胡さんのことが頭をよぎった。私に卓球の素晴らしさを教えてくれたのは、胡さんだから。そうだ、世界で１番卓球が盛んな国、中国の言葉を学ぼうと思い、大学で中国語の勉強を始めた。

中国語をきっかけに、私はたくさんの留学生と出会い、忘れられない経験をした。中国の蘇州に１年間留学をし、その成果を活かして、2014 年には、東京で行われた世界卓球選手権大会で、通訳ボランティアとして中国代表選手の通訳も担当した。自分の中国語で憧れの選手のサポートをすることができて、自分の長年の夢が一つ叶った瞬間だった。その時私は、胡さんという一人の素晴らしい中国人との出会いから全てが繋がっているんだと感じた。

中国語を学べば学ぶほど、胡さんにもう一度会いたいという気持ちは大きくなっていた。先日、私は地元に帰った際に、あの卓球クラブを訪れてみた。いつも練習していた体育館に行くと、彼女はそこにいた。私は本当に嬉しくて、中国語で「お久しぶりです、僕のこと覚えていますか？」と言うと、彼女はすごく驚いた様子で、「もちろん覚えてますよ。」と言ってくれた。彼女が子供達に卓球を教える姿は、10年前私たちに教えてくれた頃と何一つ変わっていなかった。私は、「胡さんと出会ったおかげで中国語を始めました。昔教えてくれた言葉『我爱乒乓球』。あの時は何のことだか分からなかったけど、今でははっきりその意味がわかります。胡さんありがとう。」と中国語で伝えた。彼女は泣きながら「本当にありがとう」と言ってくれた。この日のことを、私は一生忘れないだろう。それから私たちは10年ぶりに一緒に卓球をした。中国語を勉強してきて、大変なこともあったけれど、私の人生の道しるべを作ってくれた胡さんと中国語で話をすることができて、今までやってきたことが全て報われたような気持ちだった。

日本に住んでいても、日々たくさんの中国人と出会う。私の大学に留学に来る中国人の留学生、アルバイト先で来る中国人のお客さん、街で道を尋ねてくる中国人。私は、彼らに何ができるだろうかといつも思う。胡さんが私たちにしてくれたように、私も彼らに優しくありたい。今日も私は日本から中国に想いを馳せている。

## 想いは国境を越えて

**私立仙台育英学園高等学校　門馬　涼**

「中国にいる家族の為に、僕は働かなくちゃいけないんだ。」そう言った彼の力強い言葉は、中学生だった幼い私の心を動かした。

私の父は漁業関係の会社を営んでいて、外国人技能実習制度を利用し、三年に一度自ら面接

官として中国へ行き、中国人技能実習生を雇っている。近年中国の経済は著しい成長を遂げており、二〇〇〇年から二〇一〇年の十年間で国内総生産は四倍、工業総生産は八・二倍も増えている一方で、中国全土でも出生した地域によって収入に大きな格差があり、貧富の差が広がっているのも事実なのだ。

父の会社には、技能実習生として働くために、一回の面接におよそ三十人の中国人がやって来るらしいが、そのほとんどが貧しい地域に暮らす若者だという。彼らが日本で働きたい理由はさまざまだが、日本で働きたいという強い気持ちは、きっと同じだ。いや、同じであってほしいという私の願いでもあるのかもしれない。しかし、実際に採用されて日本で働けるのは、そのうちの四～五人程度なのだ。

忘れもしない中学三年生の秋、周りの友達が志望校を決め始め、着々と受験勉強を進める中、私は自分自身が何を学びたくてどこの高校に進学するべきか、分からなかった。正直に言うと、「分からなかった」ではなく、「どうでも良かった」という表現の方が正しい気がする。（自分の学力に合った学校に入れればいいや）その程度の気持ちだった。

そんなある日、私は散歩がてらに自転車で海岸沿いを走っていると、穏やかな波の音とウミネコが鳴くだけの静かな漁港に、父と一人の青年の姿を見つけた。私は何のためらいもなく父に話しかけに行くと、父も私に気付いた様子でこちらにやって来た。長身でがたいが良く、見るからに体育会系だが、どこかあどけなさの残る青年を、父は「チンさん」と呼び、彼が中国人技能実習生の一人だということを教えてくれた。しかし、その頃の私は知識がなく、技能実習生という言葉を聞いても、いまいち理解することができなかった。そこで私は深く考えずに「どうして日本に来て働いているの？」と、チンさんに尋ねると彼のあどけない表情がまるでスイッチが入ったかのようにキリッと変わり、こう言った。「僕、弟と妹がいる。まだ小さい。お父さんは、僕が小さい時に死んで、お母さんと僕と兄弟の四人だけ。家族に大変な思いさせたくない。だから、僕は働かなくちゃいけないんだ。」と。私は軽い気持ちで彼に日本に来て働く理由を訪ねてしまったことに、申し訳のない気持ちでいっぱいになった。なぜなら、彼が日本で働く裏には、もう一つのストーリーがあったことを、私は想像もしていなかったからだ。何より、あの時の彼の力強い言葉が毎日をどうでもよく過ごしていた私の心を、大きく動かしたからだ。

家に帰って来てからも、彼の話が頭から離れず、ソワソワしていたことを今でも覚えている。それから私は冷静になって、今までの私の生活を振り返り、彼の生活と比べて考えた。改めて振り返ってみると、私はやりたいことをやって、食べたいものを食べて、眠たい時に寝て、何一つ不自由のない生活を、当たり前だと思って過ごしていたことに気付いた。それに比べて彼は、毎日生きることを考えながら、当たり前など一つもない生活を送ってきたのだ。そう考えた時に、私は、中国で起きているさまざまな問題を、自分自身で考えて、解決の手助けができる力を身に付けたいと思い、今私が通っている高校を受験した。

現在、私は中国語の授業を選択していて、語学と共に、国際理解の授業にも意欲的に取り組んでいる。

今日も私は、思いやりの気持ちが国境を越えて、誰かを救える力になることを信じて、前を向いて歩いていくだろう。

## 「赤い輪」

**創価高等学校３年　北條　久美**

久しぶりに家族と夕食を食べに中華料理店へ行ったとき、私は中国とある約束をした。

その日は店の中が混んでいて、家族６人が全員座れるところへ案内してもらうと、赤色で円形のターンテーブル席にやってきた。そこにはすでに２人の親子が座っていて、私たちが入るとちょうど８人席が埋まった。私の隣は少年で、親と何か話している。聞こえるのは、なんと中国語だ。知らない人というだけでも気まずくて緊張するが、外国人となると急に焦ってきた。こんなに近くに中国人がいるなんて初めてのことだったからである。

中国を近くに感じることは日常の中でどれくらいあるだろうか？道を歩いていれば中華料理店、駅には中国語の標識、お気に入りの店には中国産のものが売ってあったり、中国人の客が爆買いをしていたり、店員さんが中国人だったりする。テレビのニュースで中国を耳にすることや、授業で中国語や中国史を学ぶこともある。さらには日本語の漢字が羅列しているのを間違えて中国語だと思って読んでしまうこともあるくらいに、私は中国に毎日触れていると気づくのだが、しかし、中国の人とは直接触れ合ったことがないのだ。

そうこう考えているときに、餃子を食べようとしていたおばあちゃんが、ラー油がないと言い出した。けれど家族は皆、中国人がラー油を使っていることに気づいているからか、誰一人取りになど動かない。隣に座っている私が声をかければいいのだろうけれども、その勇気がなかなか出ない。外国人には話しかけられないと自分で現状から避けるように壁を作ってしまっていた。その時だった。目の前のテーブルが回り始めたではないか。私の前をラー油が通り過ぎていくとき、驚き振り返ってみるとあの中国人親子の笑顔があった。私はほっとし、嬉しくなった。私もその回るテーブルへ手をかけると、家族も一緒になって同じように手をかけ、おばあちゃんの前までラー油を届けた。この時の光景を私は忘れられない。自分と家族、そして２人の親子、全員の手が同じこの赤いターンテーブルをつかんだ瞬間があった。まさに日本と中国が「赤い輪」でつながったように見えたのだ。

帰る支度をしていた親子に「ありがとうございます。」とお礼を言うと、少年が「さよなら。」と、にっこりとした笑顔で返してくれた。そのやわらかな日本語に、私の体は震えた。彼らは私の壁を押してくれ、同時に大切なことを教えてくれたのだ。主観的なステレオタイプをつくり、自分から違う目線で外国人を見てしまう、そんな壁はもういらない。同じ人間という視点で隣に並び、相手と縦ではなく横のつながりをもつ、この輪こそが大切であるのだと。また、テレビなどで見たり聞いたりする噂や情報を頭で理解できても、実際に触れることでしかわからないこともあると気づかされた。それは、その人の笑顔であるように、心で感じる温かいものであった。

今世界では南シナ海問題など、国家間の関係が揺らぎ、日中関係も懸念されている。けれども私は、断じて日中友好が崩れるようなことがあってはならないと思う一人だ。なぜなら、アジアの中心部である日中の友好が深まれば深まるほど、それが世界の平和へと直接つながっていくと信じているからである。世界平和というものは決して簡単でない。時には矛盾が生じ、流動し維持できるものではないだろう。しかし、だからこそ、私は一人の人間とつながることを大切にしたい。心と心とでつながる「赤い輪」を一人一人がつかんで、その輪を回し続ける限り、いつか平和へのチャンスが巡ってくると確信している。

日本にいる私に、中華料理店の赤いターンテーブルが中国とのつながりを考えさせてくれる機会を与えてくれた。日中国交正常化50周年を目指して、私はこれから日中友好のため、中国語の勉強に励み中国人との友情を築いていくと、この「赤い輪」に誓った。

## わたしが発信する“中国”

**大妻女子大学　人間関係学部　　濵田　麻衣**

私は、日本の大学を1年休学し、2016年2月から2017年1月まで中国・上海にある華東師範大学で中国語の語学留学をしている。1年という短い期間ではあるが、中国を知る事を第一の目的とし、中国留学を決めた。私が中国留学を決意した理由は、平成27年度内閣府青年国際交流事業の航空機による青年海外派遣により中国へ派遣された事がきっかけである。これがきっかけとなり、わたしと中国の関係は始まった。派遣以前の私と中国の関係は、“知り合い”程度であった。“知っているようで知らない。知っているから深く知ろうと思わない”そんな関係だ。このような日本人は多いのではないだろうか。なんとなく中国を知っていて、なんとなく中国が好きではなく、なんとなく中国へ行こうなんて考えた事もない。そんな日本人はインターネットなどからの“情報”により個人と中国の関係が形成しているのではないか。事実、私自身がそうであった。よって、自分が発信できる“中国”または“中国人”の情報はほとんどなかった。そんな私が中国へ派遣され、初めて訪中し、自分の目で見て感じた中国。また、中国に住んでいる人との交流をして初めて、私は“中国”を知る事が出来たと感じた。しかし、派遣中だけでは、本来の中国を知る事はできず、私の中での中国は確かなものではないと感じた。そこで、中国留学をして語学を学びながら中国を知ろうと決意した。

過去の事件により南京は日本に対す抵抗感が未だ強く、中国人の先生からも日本人が南京に行くのは少し危険だと言われた事がある。そして、実際に南京へ行った事のある日本人の友人からは、問題はないという人と少し危険な思いをしたという人の“情報”を得た。しかし、一度は行く価値がある。という点に関しては互いに同じだった為、私は南京へ向かった。行く前の私の感情としては、“怖い”けど“知りたい”という曖昧な感情であった。しかし、実際に南京へ行くと、上海から「高鉄」に乗り約2時間という距離にも関わらず、上海と比べて街並みや雰囲気が異なり、温厚な街という印象であった。そして、街中で友人と日本語で会話をしていても中国人の視線を集めたりすることもなく、例えば店の店員による態度に変化も感じなかった。そんな南京への旅行も、行く前は、悪い情報をよく耳にしていた事から“行っても大丈夫だろうか”という不安に駆られていた。しかし、自分の目で見て知る事により、これからは自分が知っている南京について、わたしなりの確実な“情報”として発信する事が出来ると確信した。大多数の日本人よりも中国との関係が深い私でさえも、南京への旅行は躊躇するものがあったので、訪中経験のないような日本人からすると、南京へ旅行に行くなど思いもつかないはずだ。なので、それらも含め日本人を対象に、このような経験を含む中国での体験などを伝えたいと強く感じ始めた。

主に、中国に対して曖昧で、かつ不確かともいえるような“情報”を持っている日本人へ向け発信し、私自身が見て感じた中国を伝えていきたいと考えている。なぜなら中国との関わりが深くなり感じた事は、日本人はもっと中国に対して関心を持つべきだという事である。“情報”に惑わされ

ず、日本からみて距離的にも歴史的関係からみても身近な中国を知る事で、個人の世界も広がるはずだと考える。日本と中国の国民感情の変化から両国の友好関係へと繋げる為、まずは私自らが“中国”を学び、深く理解しなければならない。そして、得た体験などを口頭や SNS を通じて発信する事は、これからの私ができる日中友好への一つの方法であると考える。個人としての発信力には限界があるかもしれないが、日中友好を願っている人たちは、数多くいるはずだ。そのような発信者が増える事で、だんだんと“情報”が拡散し、“あなた”と中国の関係がよりよくなる。これこそが今のわたしの夢だ。

**★入選**

**あの木**

**創価大学 通信教育学部　教育学部　村上　恵理**

「私は貴女達日本人を恨んでいるのではない！当時の日本を悲しんでいるだけだ！」

あの時、私の友人が言い放った言葉が今もなお胸中から離れることがない。私の中で数少ない中国人の友人はいつもと違い、真剣な目をしていた。まるでその目からは今にも涙が零れ落ちそうで、私は直視することすら胸が痛くなる気がして思わず目を伏せた。

私は中国人と関わるのが好きだ。理由は正直はっきりとしない。だが、彼らの持つ、あけっぴろげな性格やユーモアに満ち、情に熱いところはまるで自分にないもので、一緒に話をしているととても楽しい。自分の意見をはっきりと臆さずに言う彼らの姿は、優柔不断ではっきりしない私にとってはとても新鮮だ。

よく彼らとは冗談を言い合う。くだらない話をしてはゲラゲラ笑いあうこともある。お互いに流行の日本語や中国語を持ち入りながら、我々はまるでたがいのジョークを競い合うかのようにおしゃべりをする。そこには確かに互いに自身が日本人、中国人という意識はあるものの、それすらも超えるような何かを見るような気さえする。私はそんな友人を愛し、とても大切に思う。

「私だって、争いなんて望んでいない！いいや私だけじゃない！今の日本人のほとんどは望んでいない！私は中国、そして中国人と分かり合いたいと思っている。それが届くように、私は中国語を勉強しているってわかるでしょう？」

あの時、私は無意識に口から中国語が飛び出していた。もちろん拙い中国語だ。しかし、目の前にいる大切な友人に届くように、ただただ必死だった。

些細なことから、我々はまるで触れてはいけない何処かに触れてしまったかのように緊迫した雰囲気となり、それは突然真剣な話しに発展した。私たちはジョークを言い合う友人同士から、一中国人、そして一日本人として本音をぶつけあう仲となった。

生まれて初めて北京に行った時のことだ。私が日本に帰る一日前の夜、私達は北京の路上で別れを惜しんだ。ちょうどクリスマスイブだった。あたりは凍えるように寒く、ネオンが少し霞んで見えてそれはとても幻想的だった。

友人が路上にある一本の木を見つけて、一緒に写真を撮ろうよ、と言った。我々は無邪気に笑いながら写真を撮り、来年も再来年も、その次も、何度だってここで共に写真を撮ろうと約束した。

「もし我々に何かが起きた時はこの木のことを思い出そう、約束だよ！」
いつまでも名残惜しむかのように尽きぬ話しをして、気づけば北京の夜も更け、我々は手を振り別れた。
中国と日本という国は近いようで遠く、遠いようで近い。私はそうつくづく感じる。しかし、我々はいわば隣同士である。
今まで数えきれない輪廻転生を繰り返してきていたとするならば、ある時代では私は中国人として生きていたかもしれない。その時代で、既に彼ら彼女とはなんらかの関係を持っていたこともありえなくないと私は思うのだ。初めて行ったはずの北京が無性に懐かしく感じてたまらなったのも、もしかしたら遠い昔に私はここで生きていたかもしれないとふと思った。そういう意味でも、私は中国に対して特別な感情を抱いている。
ゆえに日中関係の友好を願わずにはいられないし、争いごとなんて起きてほしくないと心の底から思えてならない。驚くことに、こういった話しを日本人の友人にすると、多くが共感をする。大体はメディアなどの先入観で、互いの国のイメージがなんとなく悪くなってしまっているケースが少なくない。しかし我々は人間だ。語り合うということができる。
そこに、壊せない壁などあるだろうか？私はないと信じている。
気づいたら私達を互いに泣いていた。そうだ、我々はただ互いに分かり合いたかっただけだったのだ。
もう、言葉なんていらなかった。
我々は涙をぬぐい言った。
「ねぇ、あの木、覚えている？」

## 中国から来た朋友

**熊本大学 文学部 コミュニケーション情報学科 2 年 岩野 美咲**

「XJAPANが大好きなんだ！」なぜ日本語を勉強しようと思ったかと聞くと彼女はこう答えた。なぜ彼女が私の世代ですらよくわからないようなアーティストに興味を持ち日本に来たいとまで思ったのか不思議に思い興味を持った。1 年前に交換留学生として北京から日本に来た時に彼女と私は出会った。私が中国について知るようになったのはそれからである。それまでは、中国について知る機会がなくどちらかと言えば悪い印象の方が強かった。私は短期留学をしたこともありニュージーランド、タイ、ブータンなど様々な国の人と接する機会があり、慣れているほうだったが、中国人と交流を持つのは初めてで不安もあった。私の中では、中国人といえば、頑固で自分の意志が強いイメージがあり、いい関係を築けるかという不安があった。その反面、中国語を履修していたし、言語を教えてもらったり、新しい文化を知るいい機会になればいいと思っていた。日本に到着した日からチューターとして学習や生活の補助をしていた。私の想像と違って、彼女はとても謙虚で礼儀正しくなおかつしっかりと自分の意見を持っていて、一緒に過ごしていて嫌悪感を抱くことは全くなかった。彼女の立ちふるまいは私の予想をみごとに裏切った。やはり、イメージは一時的な感情に過ぎない。その人個人の中身、本質を見るべきだと確信した。それから週に 1、2 回会って今日は何を勉強したかやどんな出来事があったかを話したり、熊本の町案内をしていた。毎回

会うのが私にとって楽しみになっていた。最近では、社会問題について意見を交換したり、私の相談に親身になって乗ってくれている。私にとって彼女と過ごす時間はとても貴重な時間だ。1 年前までは、中国人とこんな風に交流を持つ日が来るなんて思ってもみなかった。

しばらくして私の両親が熊本に来たとき、両親に留学生を紹介した。両親もどんな子なのだろうと興味津々だった。彼女は両親のために中国から持ってきた贈り物を用意していた。お世話になる人にはお礼をするようにと小さい頃からよく言われていたらしい。一緒に食事をして話もとても弾み、両親は彼女をとても気に入り、「いい子だね、娘が一人増えたようだ」と喜んでいた。彼女を見ているとお世話になった人に対して、きちんと感謝の気持ちを持つことは大切だと気付かされる。両親も今までは中国について知る機会はほとんどなかった。彼女が、私や私の両親と中国を繋げてくれた。

そんな毎日を送っていたある日、私たちの日常を一瞬で変わってしまう出来事が起きた。熊本地震だ。私も何日か避難所の生活を余儀なくされ、また彼女も別の避難所で過ごしていた。彼女は熊本に住んでいる他の留学生と一緒に私の実家がある福岡に避難してきた。ちょうど同じ日に私も福岡の実家に避難していた。ほとんどの中国人留学生は福岡についてすぐ母国に一時帰国したようだ。帰国するか迷っていた彼女に私の実家にくるように勧めた。両親に暖かく迎えられホッとしたような表情だった。本震が起きたときでさえ泣かなかった彼女が、困っている人がいっぱいいたのに自分は何もできなかった、本当に情けないと言って涙を流した。私は、今は無事でいることが大事だよとやっと返した。そのシーンが心に鮮明に残っている。結局彼女の両親の希望もあり一時帰国することを決めた。私は必ず帰っておいでと見送った。ひょっとしてもう戻らないのではないかと不安に思ったが彼女の両親からの手紙と心のこもった贈り物と笑顔を持って帰ってきた。私はとてもほっとした。この時の気持ちは絶対に忘れないだろう。手紙の中の一節に「患难见真情」と書いてあった。それは難儀を共にした同志こそ心が通じ合えるという意味で、昔からある言葉だそうだ。それはまさに私と彼女を表した言葉だと確信している。

## 互いに見つめ合うこと

**法政大学 国際文化学部 3 年 長橋 侑生**

私は自身が日本人でありながら、日本人に対して一つ納得できないことがある。

それは我々日本人にみられる強い排外の傾向である。日中関係史の専門家である楊仲揆はかつて、台湾企業のエリートの言葉を引用し、「日本人の団結はただ団結して外からの人を追い払うだけで、いささかも愛の心を持たない」と言った。日本人がもつ強い団体意識と帰属感は時には中国人に対してマイナスイメージをもたらしているのではないだろうか。

私には助けてあげられなかった友人が2人いる。どちらも以前一緒にアルバイトをしていた中国からの友人だ。私のアルバイト先は少し珍しい。一見ごく普通の飲食店だが、雇う側は日本語の会話レベルが日常会話以下の留学生も受け入れ、接客以外の仕事を任せることがある。留学生は皆、生活費を稼ぐためだけでなく日本語力の向上に期待をして仕事をする。もちろんどちらの成果も得られることは確かだ。しかし私が感じるのは我々日本人が彼らを排斥するような言動である。

もし彼らの仕事が遅いとチームメンバーは彼らを怒鳴ることがある。もし彼らが何かを間違えるとどこからか溜息が聞こえることもある。

ここでの仕事を辞め、故郷である上海に帰国をした洪さんと、私は今冬に再会した。彼は職場で日本人に何か言われるたび心の中でいつも「じゃあ、あなたには中国語ができるのか、日本人であることがそんなにも偉いのか」と叫んでいたと言う。まったく彼の言う通りだ。私たちは時折、集団の中の一人として存在することで自分たちの言動が外国人にとって非常に不可解であることに気付いていないことがある。

そして、これは私が上海から日本に帰国してまだ間もない頃だった。私が以前と同じアルバイト先に復帰すると、新人として一つ年下の王くんという男の子が働いていた。私は店長と王くんとの間でのちょっとした通訳を任されていたので、彼と一緒に働くことが非常に多かった。もちろんお店が忙しくない時は、まだ日本での生活に不慣れな様子だった王くんと日本での生活について又は上海での私の留学体験についてなど様々な雑談を2人で楽しんだ。しかし、ある日、私は任された仕事を黙々と処理していた最中に、突然キッチンの奥の方から聞こえてきた罵声に対して、震えと、体温の上昇と、目頭がぼっと熱くなるのを身体で一気に感じた。店長が王くんに誤って口を滑らせたのは「お前、日本語が分からないなら自分の国に帰れよ」という一言だった。そして私にはその日、王くんと会話する時間を与えられず、王くん自身も私には特に何も言わないまま数日後、アルバイトを辞めてしまった。

私は王くんを誘い出し、また数人の友人も連れて皆で食事をした。もちろん、その時にアルバイトに関する話題は一切しなかった。悪いのは私たち。そして、強い集団意識は持つくせに、一つの大きな間違いに対し、それはおかしいと主張できない自立性の無さ。日本人の弱点、そして私自身の弱点もここにあると思う。

日本に在住している中国人の中には、「日本は何より清潔だし、礼儀や気遣いの面では中国は日本に勝れるものがありません」などと言ってくださる方がいる。しかし私からしてみると、そのように日本を褒めてくれる貴方の心こそが日本人より優れていますと言いたくなってしまう。何を言おう私は中国人が大好きである。日本は歴史的にみても中国から様々な技術や知恵を模倣してきた。中国なしに今の日本は存在し得ない。現代においてももちろん「どっちが勝っている」ということは言えないし、今後も互いに模倣し合い、高め合っていくべきだと私は思う。私が親しくなった中国人は、すべて私の人生のパートナーであるという認識をこの先もずっと持ち続けていたい。

## 中国語に耳を澄ます

**県立広島大学　経営情報学部　経営学科　3 年　流森　健吉**

2016 年 5 月、記念すべき初めての中国渡航。私は重慶に留学中の友人を頼り、1 人で日本を発った。

私と中国を結び付けてくれたのは、大学で中国語を教えてくれた先生だ。北京出身の先生が話す普通語は一つひとつの音がとても美しく、流れるような抑揚のリズムに心を奪われた。「せっかくだから検定受けてみたらいいわよ。」と講義の最終日に言われたが、経営学を専攻する私はもう中国語の講義を受講できなかった。それでも諦めきれず独学で勉強を続け、ついに 3 級を取った。

先生に合格を報告したとき「まさか、ほんとうに」という驚きの混じった笑顔を見て私は嬉しくなり、中国というものにはまり込んでいった。

目の前に迫ってくる中国大陸を飛行機の小さな窓から眺めながら、私はまだ会話に難があることに不安を感じていた。乗り換えの虹橋空港で飛び交う中国語にたじろいでいると、突然、中国人のおばあさんに話しかけられた。速くてクセの強い中国語に私はまともに反応できず、かろうじて何か質問されているということだけ理解した。私は「我是日本人、听不懂（私は日本人です、分かりません）。」と答えるのが精いっぱいで、申し訳なさそうな表情を浮かべると、おばあさんは納得したように他をあたり始めた。このとき私は自分の中国語が相手に通じたという喜びを感じた一方で、ほとんど聞き取れなかったという悔しさをも感じた。なんとか無事に重慶江北空港に降り立った私は、友人の住む寮までタクシーで移動した。運転手のお兄さんは、私が日本人だと分かると「中国と日本は仲が良くないと言われているが俺は気にしないよ。」と言い、最後に固い握手を交わして別れた。翌日の早朝、私と友人は中心街から離れた地区へ向かうため、バスの乗車券を買う列に並んでいた。窓口で乗車券を買うのは友人も初めてのことで、行先や時間を伝えるのに不自由していた。すると横からおじさんに割り込まれ、窓口を占領されてしまった。私は「やられた」と思った。「中国人は列に並ばない」、「中国では普通のことなのだ」、と自分を納得させ、私たちは後ずさりしようとした。すると、おじさんは振り返り、私たちに乗車券の買い方を丁寧に教えた後、窓口と私たちの仲介役になってくれた。そして、乗車券が発券されたのを横で見届けるとそのまま去って行った。私は困っている外国人を善意で助けようとしたおじさんを、一瞬でも疑ってしまったことを恥ずかしく思った。

私は日本を発つ前、戦争において日本軍が重慶に繰り返し爆撃を行い、多くの犠牲者が出たことを知っていた。重慶では毎年 6 月 5 日に事件の犠牲を悼み、市民が歴史を忘れないよう防空警報を鳴らしている。今年も、事件の生存者や市民らが黙祷し、献花した。重慶に降り立つ直前まで私は、重慶の人たちは快く日本人を受け入れてくれるのだろうかというもう一つの不安を抱えていたのだ。しかし、見ず知らずの日本人に対して重慶人はみな優しく接してくれた。私はただ、見たことも知りもしない、自分の中で誇張された日本に対する抵抗感情を恐れていたにすぎなかった。

事実を知らないということは恐い。間違った固定観念が、中国人の人情の厚さをかき消してしまう。また、ある日本人は、中国人が話す様子を見て騒がしいと言うが、実際に中国語を話してみるとはっきり発音しないと伝わらないことが分かる。マナーがなっていないわけではない、単なる言葉の違いである。街のどこかで中国語が聞こえてくるとき、私は耳を澄ます。中国人は騒がしいという先入観を持つと、その美しい音の抑揚に気づくことはできない。彼らが話す言葉に耳を澄まし、困っているときは「你好」と声をかけて助けると決めている。それは私が重慶で「請問」と助けを求めたときに、優しく接してくれた人たちへの感謝の気持ち。そんな私と中国の優しい関係が、世界中に広がりますように。

## 知ること・知ってもらうこと

**聖心女子大学 1 年　和田　栞奈**

昼下がりのこと。染め上げられたグレー色の空からこぼれる生温かい雨が地面を穿つ。アスファ

ルトは湯気をあげながらあたり一面に悶々とした空気を放出する。雨と粉塵が混ざり合い、都心に立ちこめる。この空気の味が私の頭を悩ませる。中国地方の田舎町で生まれ、荘厳な大自然に囲まれて育った私には縁のなかった匂いが否応なく鼻腔に襲いかかる。臭い酔いとでも言えそうなこの症状は三ヶ月やそこらでは解決できなかった。重い足を引きずりながら最寄り駅にたどり着き、いつもの地下鉄に乗り込む。お昼過ぎと言ってもさすがは東京。座席があいていない。こんな時、私は東京への憧憬の念を放り出して、生まれ育った故郷を離れたことを悔やむのだった。いつもだったら可愛らしいと感じるはずの、窓を見つめる小さな少年。その子が座席に座っているというだけで、なんだか妬ましい気分にもなった。だがその時、

「席をどうぞ」

隣の女性がひょいと男の子を膝に抱えながらおっしゃった。その片言の日本語が、曇天に覆われた暗曇の間隙を縫い、心の奥に響き渡った。片言の日本語が私に何かを思わせたのだった。「中国人でも、、、」と。

あなたは中国の方々をどう思いますか？そんな質問を、無造作に選ばれた日本人に投げかけたとしましょう。それに対する意見は、ネガティブなものが多いだろうと予測するのは難しくない。マナーが悪い、非常識、口調が激しい、独善的、、、その根拠はさまざまだろう。たいていの日本人は中国の方々によい印象を持っていないのだから。

「あら嫌、隣の席に鞄がぶつかっているじゃない。これだから中国人は。」

と言われたことがある。顔が少し大陸風なのは認めるが、私は日本人だ。不注意で鞄を無造作に扱っていた私は日本人なのだ。

マナー違反＝中国人という先入観がこれでもかというほど押し付けられた苦い思い出である。私たちは偏見とも呼べる価値観を植えつけられてはいないだろうか。メディアの発する声はいたずらに扇情的になってはいないだろうか。視聴者の感情に寄り添いすぎた報道機関の提供するあまたの情報は、反中の呪縛に捕らわれ過ぎている。その結果、過剰に加熱された市民の感情は、お互いに歩み寄ることを放棄し、凝り固まったドグマの中で相手を評価し軽蔑することに向かっている。これは日中両者に言えることではないだろうか。

私たちはお互いの文化･歴史の理解に消極的過ぎた。それにより理解の薄い両者は多くの衝突をくり返している。民間レベルの軋轢から国家レベルの争いまで。世界の中では比較的後退地域であったアジア地域の今日のめざましい発展を率いてきた代表的な大国同士が、アジアンファミリーとしての相互協力に乗り出したとき、その恩恵は日中の更なる発展にとどまらず、アジア地域や世界の更なる幸福に繋がるはずだ。二十一世紀を牽引する若年層の私たちがこの潮流を生み出して生きたい。